

四年越しのレスに泣く私を義父が救済。

『息子の尻ぬぐいだ』と自慰手伝いで開発され、

深夜に自ら部屋をノックし挿入をねだるまで甘く騎けられる話

サンプル（一部抜粋）

「んー…」

ピピピピッと響くアラームの音で目が覚める。

「…朝ごはん作らなきゃ。」

隣で眠る夫の穏やかな寝息を聞いて、音を立てないようにそっと布団を出る…これが私の一日の始まりだ。

私の名前は愛。二十九歳の専業主婦で四歳年上の夫を愛する普通の妻だ。

「…じゃあ、おやすみ。」

夫は私の頭をそっと撫で、私に背中を向けて眠ろうとしていた。

「…」

私は幸人の背中を見ながら小さく息を吐いた。

「ねえ、幸人……したい……」

幸人は私から明確に視線をそらして、困ったように笑って私の頭を撫でた。

「……今日は疲れてるんだ。ごめんね。」

それに隣の部屋に父さんがいるんだし。ほら、色々と気を遣うじゃん？」

嘘つき。お義父さんと同居する前から、疲れてるって言い訳をしていたくせに……。断る理由が同居で増えて……あなたはシなくて済むって安心してるの……？

「……息子の不始末は親の責任だよな。」

しばらくの沈黙の後、お義父さんの小さなぼやきが耳に入った。

「……え？」

「力、抜いてなさい。」

「ん……っ、お義父……さん、や、なに……してるんですか……っ」

「……いいから。これは息子の尻ぬぐいだ。」

ただ……オナニーの手伝いをしているだけ。」

「レスはいつから？」

お義父さんは表情を一切変えず、私の手首をぎゅっと掴んでそう言ってきた。

「え…」

「いつから？」

「なんで…」

「昨日のあの感じだと、多分随分ご無沙汰じゃないかなと思ってね。

もしそうなら…昨日のオナニーだけじゃ満足出来ないでしょ？」

表情が一切変わらないお義父さんが…怖かった。

「…そんな事聞いて…どうするんですか…」

捕まれた腕は…びくとも動かなかった。

「愛ちゃん。質問に質問で返すのは愚行だね。

俺はただ息子の尻ぬぐいがしたいだけだよ。」

「それに…愛ちゃん、昨日泣いていただろ？」

あんなの見て、放っておけると思う？

いつも明るくて笑顔で…楽しそうな姿しか見てこなかったのに、その裏側で今までも泣いていたのかなと思うと、居ても立っても居られないよ。」

お義父さんはそう言いながら優しく私の頭を撫でた。

優しいお義父さんの事だ。本当に心配してくれているのかもしれない。

昨日：初めて泣いた顔を見られたから。

尊敬するお義父さんの下心なんて知りたくない、見たくもない、氣付きたくもない：日常に不満を抱えていたくせに、日常にいまだに縋ろうとする自分が滑稽だった。

：お義父さんの優しさを：信じたかった。

だから私は：

「四年以上：です：」

と小さく答えを漏らした。

「だめ：お義父さん、やだ、それだけはだめ：！」

慌ててお義父さんの手首を掴んだけど：もう遅かった。

お義父さんの長く太い指は、もう私のクリトリスを捉えてしまっていた。

「ああ：っ、や、ま：って：」

「待たないよ。

愛ちゃん、君はもう四年以上も待ったんだろ？」

「もういいだろう？」

もう待たなくていい。そろそろ解放してあげよう。不満から。」

お義父さんはそう言うと、クリトリスをさする指の速度を上げた。

「んああ…あ…や…あ…あ…」

四年以上も待った…そんなお義父さんの言葉に何も反論できなかった。だってその通りだったから。

ただ愛して欲しかった。

セックスなんてなくても…幸人はそう言うけど…

彼の言う事は間違つてはいないのかもしれないけど、それでも愛されたかった…。

こんな風に気持ち良くしてほしかった。

願わくば夫に…。

「何か手伝おうか。」

幸人を見守っていると後ろからいきなり声を掛けられ、ビクツとして後ろにいるお義父さんの顔を思わず見てしまった。

「一人だと大変だろ？」

幸人はこちらを見る事もせず、ただテレビを見て笑っていた。

「…声、出さないでね。」

お義父さんは小さな声でそう言うと、私のスカートの中に顔を入れ…

指でゆつくりとクリトリスをなぞり始めた。

「っ、や…」

昼間の余韻が…あの気持ちよさを思い出して、足が震えた。

次の瞬間、ぴちゃつと小さな音と共にお義父さんの舌がクリトリスに当たるのを感じた。

「…っ！」

「しーっ」

お義父さんの息がかかる…

その小さな刺激だけで、もどかしくておかしくなりそうだった。

「ん？なんか言った？」

幸人が私の声に少し反応して、こちらを見た。

私は慌てて首を横に振り…

「な、なんでもないの…」

と取り繕う事しか出来なかった。

「…バレたくないなら静かにね。」

お義父さんは小さくそう言うと言とジュルつとクリトリスを吸い…中に入れた指を激しく動かし始めた。

「ああ…ん…っ…あ…」

声を出したらバレちゃう…バレたら終わる…

分かってゐるのに…与えられる快感が強烈過ぎて、気が付くと私は足を大きく広げていた。

「や…いく…やだ…っっ」

自分から足を広げて、お義父さんの舌を求めるようにクリトリスを押し付け…勝手に腰が動いてしまっていた。

幸人のイビキが響き出した五分後、私は物音を立てずにベッドから抜け出した。

お義父さんの部屋の前にやってきて、本当にこれでいいのか、一瞬手を止めた。

でももう我慢なんてできなかった。

きつと…二度と普通には戻れないんだろうなと気付きながらも…二回ノックしてしまっていた。

「どうぞ」

お義父さんの優しい声が響く…私を壊すお義父さんの声が…。

私はそっとドアノブに手をかけ…日常を捨ててお義父さんの部屋に入った。

（全容は製品版にて）